E208

歴史災害の記録を活用した防災学習教材の検討
Study of Disaster Prevention Learning Materials Using Historical Disaster Records

○黒澤宗一郎・矢守克也
○Soichiro KUROSAWA, Katsuya YAMORI

The purpose of this study is to develop Disaster Education materials that will help to bring to light important problems (The Hidden Problems) that are not usually addressed in Disaster Education, by introducing the perspectives of those involved in Historical Disasters recorded in Historical Records, and to raise awareness and stimulate discussion of these problems, and to develop a theory on the effects and issues of Disaster Education using Historical Disasters. Several workshops were held for university students and community disaster reduction leaders to discuss issues such as "How young people can balance volunteer activities and resumption of academic studies" with historical examples. We then discussed the learning effects that a Historical Disasters perspective can bring to Disaster Education.

１．はじめに

災害時に誰もが当事者になり得る重要な問題であっても、その特性等が原因となって普段の防災教育では取り上げられる機会の少ないものがある。例えば避難所における性犯罪やボランティアとのトラブル、被災者に対する差別といった問題は被災者個人のみならず地区防災にも重要であるが「不特定多数の学習者が議論するには内容がセンシティブに過ぎる」「関係者間の軋轢が懸念される」「当事者意識を持つことが難しい」といった特性が認められる。本研究はこうした「普段の防災教育では取り扱われることの少ない問題」（潜在している問題）に関する防災学習教材を、史料に記録された歴史災害の被災者の視点を導入することで作成し、学校や自主防災組織等における実践を通じて、問題の啓発や議論の活発化に貢献する防災教育の理論の構築することを目指す。

２．先行研究の概括

歴史災害を題材とした防災教育の実践例には、1944 年東南海地震・1945 年三河地震の被災者証言を絵画に描き起こして小学校の防災授業に活用した木村・林（2009）や、明治 17 年 8 月台風後に堤防修復に貢献した人物の伝承碑を中学校国語科の授業で紹介した朝倉（2022）の事例等が挙げられる。これらの先行事例では、伝承碑等の史料や被災者証言といった地域に埋もれた学習材を活用して児童生徒の関心を惹きつけながら「過去にも現代にも共通する事象や教訓」を史料から選択的に抽出して用いるという共通点が認められる。一方、地域に限定されない災害史料の活用や「一見すると現代とは無縁に思われる事象や教訓」に着目した防災教育実践には十分繋がっていない点について課題もみられた。

３．歴史災害の視点が持つ学習効果

本研究は歴史災害における「一見すると現代とは無縁に思われる事象や教訓」にこそ、現代の防災に「潜在している問題」を考えるヒントが隠れているのではないかという問題提起を出発点としている。

例えば、内閣府（2005）に収録されている磐梯山噴火（1888）の被災者証言の一つに、地域住民が磐梯山の黒煙を見た際「磐梯山が抜けて化け物が出て来る」「逃げてもだめだから化け物を殺せ」と鉄砲や鎌を持ち出したという証言がある。このような言動は一見現代の防災と無縁に思われるが「大災害が起きたら逃げても無駄だ。ここに留まるしかない」という避難の諦めは、孫ら（2014）が南海トラフ巨大地震の被害想定（第一次報告）発表後に高知県四万十町興津地区の高齢者から「足腰が悪いので、津波が来たら、とても逃げられない」等の意見を聴取したことからも明らかなように、現代にも存在するものである。このように歴史災害の「一見すると現代とは無縁に思われる事象や教訓」から、現代の防災で見落としがちな問題（潜

在している問題）が浮かび上がる。

４．「潜在している問題」の特徴

「潜在している問題」には 3 点の特徴が認められる。第一の特徴は「平時と災害時で潜在／顕在の度合が変化する」点である。例えば平時には顧慮しないような信憑性の低い情報を、災害時には不安と焦燥感から信じ込み、拡散に加担してしまう現象もこれに分類される。第二の特徴は「時代を超えて観察される」点である。これは前項で述べた避難の諦めが例として挙げられる。第三の特徴は「法制度や価値観等の異なる時代の方が 現代以上に顕著に表出しやすい」点である。例えば、災害時の誹謗中傷に被災者が抗議することの困難さを議論する際には、情報の発信者と受信者の影響力に歴然たる差があった時代における事例を取り上げる方が当事者の立場を想像しやすい。

５．「潜在している問題」と歴史災害の視点

「潜在している問題」の潜在性は「危機意識や当事者意識の持ちにくさ」「タブー視され、取り上げられる機会が少ない」の 2 要素から構成される。それに対し、歴史災害の視点には 3 つの学習効果が認められる。第一の効果は「可視化」である。現代とは価値観等が異なる時代における事例を併せて見ることで、問題構造が明瞭に立ち現れる。第二の効果は「視点の再構造化」である。一見現代の常識とは反して見える歴史災害の被災者の選択や言動から現代の学習者が見落としていた「現代でもあり得る選択・言動・問題」に気づく。第三の効果は「仮託」である。これはタブー視されてきた問題について、歴史災害における類例に置換して語り直すことで議論を進めるものである。

６．実践の方法と結果

「潜在している問題」のうち「若者のボランティア活動と学業再開の両立」と「ボランティア受け入れ時のトラブル」の 2 つのテーマについて、歴史災害と現代災害における事例を収集し、図 1 に示すようなカード型の教材を作成した。学習者がそれぞれの事例と時代背景の説明を読んだ上で「自分ならどうするか」という設問について「賛成する」「受け入れる」「あきらめる」「拒否する」の 4 枚組のカードを使って回答し、グループディスカッションをする。

図１　ワークショップで使用したカード型教材の例

この教材を用いて、龍谷大学政策学部所属の学生、大阪市中央区中大江地区・天王寺区大江地域・阿倍野区の地域住民を対象に計 4 回のワークショップを実施した。その結果、参加者が歴史災害の被災者の役割演技を通じて普段口に出しにくい防災に関する悩みや心情を吐露し、或いは不合理に見える歴史災害の当事者の言葉から防災に関する重要な知見を再発見できることがわかった。今後は参加者の言動や議論の推移を詳細に分析し、教材の改良に繋げていく。

参考文献

朝倉和，2022，「「宮本清蔵君之碑」を用いた防災教育―大崎上島と津波―」『広島商船高等専門学校紀要』第 44 号:174-182.

木村玲欧・林春男，2009，「地域の歴史災害を題材とした防災教育プログラム・教材の開発」『地域安全学会論文集』 No.11 ： 215-224.

孫英英・近藤誠司・宮本匠・矢守克也，2014,「新しい津波減災対策の提案―「個別訓練」の実践と「避難動画カルテ」の開発を通して」『災害情報』第 12 巻: pp. 76-87.

内閣府，2005,「1888 磐梯山噴火 資料編」.